
紅 闇夜に咲く枯れた花

日本政府の犬(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅 闇夜に咲く枯れた花

【Nコード】

N6304Z

【作者名】

日本政府の犬（仮）

【あらすじ】

悪宇商会直属の揉め事処理屋である星嚙絶弥。そしてその弟子である馬紋喜美香の出会いから現在同時進行している 真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花 のアナザーストーリーです。紅の方が強く、まじこいはほとんど関係ないです。 ※こちらの連載は不特定です。

零話 『序章』

人生に絶望を感じていた。

どうしてなんだろう。どうしてお母さんとお父さんとお兄ちゃんが死んだの？

私は家族でクリスマスを祝っていただけなのに、なんで皆を殺すの？

なんで私の手足を奪うの？

なんで私だけ生きてるの？ 早くお母さんとお父さんとお兄ちゃんの所に行きたい……。

それは突然の事でした。

私達家族は毎年の恒例イベントとして、教会で礼拝ミサをしていた時に、彼らが現れました。

私の家系はクリスチャンで、毎年ハロウィンやイースターには必ず神に祝っていました。惨劇が起こった田舎の教会で、私は聖歌隊の一員として神の為に謳っていました。

あの時の事は鮮明に覚えています。丁度私達聖歌隊が『ハレルヤ』を歌い終わった瞬間でした。

教会の窓から中東人と思われる外国人の人たちが銃を持って現れました。

刑事だった私のお父さんは、勤務中に立ち寄っていた事もあり、銃を出して戦いました。ですが呆気なく殺されました。たった一つの拳銃では、マシンガンに勝てませんでした。

お兄ちゃんはお父さんが死んだ直後に逃げ出しました。外人が入って来たドアから逆のドアへ逃げたんですが、外人はそこで待ち伏せていました。

お兄ちゃんの頭が赤いぶよぶよした塊になりました。憶えています。だってお兄ちゃんの脳みそが私の顔にへばりついたんです。

ぶによ——私は状況が掴めませんでした。お兄ちゃんの頭が吹き飛んだことも、お父さんが全身穴だらけになった事も。全部悪い夢だと現実逃避しました。

ですが現実残酷です。

お母さんが私の元へ駆け寄って、包み込んでくれたんです。『大丈夫、お母さんがいるから大丈夫』って。

私はお母さんの顔を確認しようと顔を上げました。お母さんの優しい笑顔を見れば少し楽になると思ったから。

ですがその望みは叶いませんでした。だってお母さんの顔が赤く染

まっていたから。

私は泣き叫びました。

そんな私を外人は片手で抱きかかえ、子供を連れ去りました。

教会の外には一台の黒いトラックがあり、私は荷台に入れられました。

讃美歌の仲間たちが全員トラックに入れられると、突然白い煙がモクモクと出てきて、私はゆっくりと暗闇に落ちました。

気が付くと、私は病院のベッドに横たわっていました。

私は当然、『助かったんだ』なんて幻想を抱いていましたが、違いました。

身体を起こすと上半身が異様に軽かったです。そして私はある違和感に覚えました。

あるはずのモノが無い。大切なモノが無い。肩から先が何も無い。

理解しました。私は両腕を切り落とされたんだと。

腕が無くなったと知ると、突然腕が痛くなっただけです。無いはずの腕が痛くて痛くて辛かった。まるで熱せられたアイロンで両腕をプレスされたみたい痛みです。熱くて腕が潰されるように痛い。幻肢痛と言います。後に師匠から聞きました。四肢を無くした時に発生する幻痛です。

私の鳴き声に気付いたのか、教会を襲撃した外人がやってきて、私に一本の注射を打ちました。

そこでまた意識が失います。

また目が覚めると、また違和感を感じました。

ああそうか。あの外人が私をダルマにしたんだ。

そこで一回私の心が壊れました。

もう考えることが苦痛で、何も考えたくありませんでした。

何日経ったでしょうか。私は男達の言うまま食事をして、特に何もされる訳でも無く、ただただ過ごしてきました。

そんな生活も終わりを迎えました。私は何日ぶりの風呂に入り、ピンク色の可愛いドレスに着替え、坊主頭の痩せた男性に人形を持つように大事そうに持ち上げられて、とある一室に連れてこられたんです。

その一室にはいかにも金持ち風の肥満気味の五十代日本人男性と十数人の外人がいました。

彼は私を一目見ると、大層喜んだ様子で外人に握手をした。そして日本人の付き人と思われる黒いスーツを着た男性がスーツケースからお金を取り出しました。

その時、コンクリートでできているはずの壁が崩れました。

崩れた壁の向こうには、両肘から二本の角つのを生はやした鬼が立っていました。

外人は銃を取り出してお父さんを殺したように、鬼を撃ちました。

ですが鬼はそれよりも早く中東人の一人の懷に飛び込んでいました。

鬼が一殴りすると、外人の腹に大きな空洞が出来ました。

そこからは鬼の所業と呼べる一方的虐殺が行われました。ある外人は首が飛び、ある外人は窓から落とされ、ある男は私と同じようにダルマにされたり。

一通り殺し終えると、鬼は日本人男性と対峙しました。

「えーどうも庚塚隆司こうづか たかしさん。私わたくし、悪宇商会の星嚙絶弥と申します」

たかしと呼ばれた男性は、小便を漏らしながら地面に座り込み、放心状態でした。

それでもゼツヤと言う人はお構い無しに一人で話を進めました。

「私、貴方のお父様である高貴様こうきさまより依頼を受けた、いわばヒットマンです。

実は貴方の特殊性癖がお父様の耳に届いて、これが公おおやけになる前に、貴方を殺せと言われました。

しかしアジアの組織に依頼して、態々日本人の性処理機を作る発想、下種げすですね」

そう言って、鬼はたかしの首にそつと手をかけて、ぐりんと男の首を一周回した。

私と鬼以外が死に、初めて鬼が私を視界に入れた。

「あーあ。可愛そうに。傷口が綺麗に塞がれてる。これはもう一生このままだ」

一生このまま。現実的で希望も何もない言葉を吐かれたのに、私は歡喜していた。

だってこの人の腕、機械なんだもん。

「……ゼツヤさん。お願いしたい事があります」

「お？ 五体不満足が俺にお願いしたいだと？ 聞くだけ聞いてやるよ」

「私を弟子にしてください」

「は？」とゼツヤさんはポカーンと口を開けたまま驚く。

「私はもう、何も失いたくないんです。だから、まずはその腕が欲しいです」

私の言葉を聞いたゼツヤさんは、笑った。理由は知らない。ただ笑っていた。

「ははははは！！ はあ。良いぜ。その目氣に入った。弟子にして

やる。が、一つ条件がある」

何だろう。条件と言うのは。お金だったら駄目だな。私、一銭も無い。

「俺に殺されても文句言うなよ。お前が気に入らんかったら、即刻処刑だ」

ゼツヤさんは私を持ち上げて、目線を合わせた。

「お前の名前は？」

「馬紋喜美香です」

これが、私と師匠の出会いである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6304z/>

紅 闇夜に咲く枯れた花

2011年12月21日01時51分発行